

# 「樋口先生」にて発見した文書

## 樋口真吉の自筆の新発見の文書なのか??

### 樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人

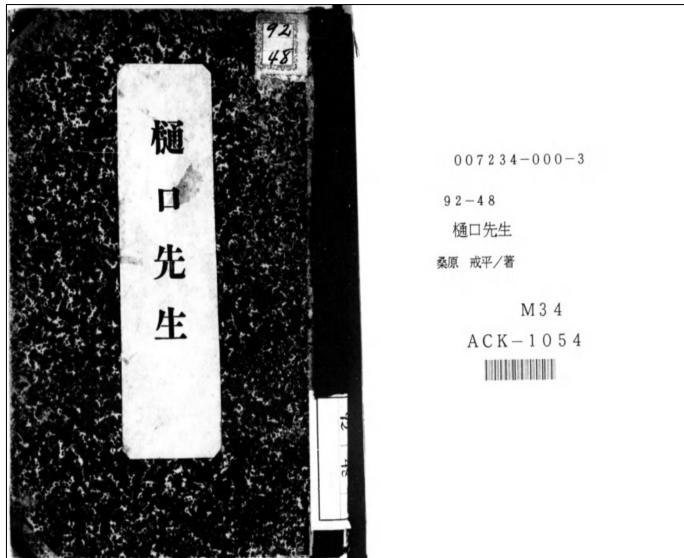
会長 土森正一

文責 寺尾敏夫

### 渋谷雅之先生の解説文と披露

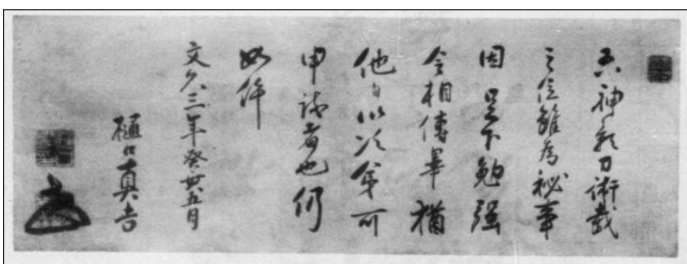
●前号の会報誌にてご案内しましたように桑原戒平著「樋口先生」(国会図書館電子書籍版)の巻頭に樋口真吉の署名入りの文書、並びに佐井寅次郎宛ての文書の二通を発見したものの、内容が判読できなないので「樋口真吉」の著者渋谷雅之先生にその解説をお願いしたところ、快く協力して下さいました。以下にその内容を紹介します。

●この「樋口先生」は樋口真吉の剣術の愛弟子の一人であり、戊辰



戦争には真吉と共に迅衝隊の一員として闘った桑原戒平が、明治三十四年に出版した真吉の伝記であります。

●桑原家の祖は前号でも触れましたが初代中村藩主山内康豊に従ってきた医師で、中村藩改易後は江ノ村に移り庄屋となり周辺に分家。戒平は蕨岡伊才原大庄屋桑原義厚の長男として弘化元年(1841)に生まれた。学問を安岡良亮に、剣術を真吉に習った。維新東征で



は迅衝隊十二番隊半隊長差引役で、会津では負傷している。明治期には安岡良亮の部下として熊本県に奉職、神風連の乱で安岡良亮が倒れた後熊本県令代理を努めている。安岡良亮の長女芳と結婚した。

●明治三十年になると世の中も落ち着き、幕末維新を振り返る機運が生まれていた。戒平は真吉の戊辰戦争時の評価を見直す話も伝わってきたので、敬愛する樋口真吉の実像を伝え

吾神影刀術載之位雖レ為二秘事一  
因二足下勉強一  
令二相傳一畢。猶  
他日以二次第一可二  
申渡一者也。仍  
如件。  
文久三年癸亥五月  
樋口真吉

たいとの想いで真吉の伝記をまとめ上げて明治三十四年出版に漕ぎつけた。その影響があつたか分からないが明治三十六年樋口真吉には従四位が追贈されたのである。その渾身の想いで書き上げた真吉の伝記「樋口先生」の巻頭の部分にこの二通の文書を付けていた。

○文書一

●この文書の日付は文久三年五月とある。五

〔読み下し〕  
吾が神影刀術載(さい)之位、秘事(ひそこと)為(な)ると雖も、星下(ほし)勉強(べんきょう)に因(よ)り相傳(あひたづ)せしめ畢(おわ)んぬ。猶(なほ)他日(たいつ)次第(しだい)を以て申(ま)し渡(わた)す可(よ)き者也。仍(なほ)つて件(くだん)の如(ごと)し。  
文久三年癸亥(みづの)とい五月  
樋口真吉

月八日に吉田東洋が暗殺された時、真吉は間違ひなく中村に居た。戒平は樋口道場にて真吉から免許皆伝を授けられたのである。しかしこの直後から真吉の運命は激変する。高知へ転勤となり、六月二十一日には藩主の側近に取り立てられて藩主の上洛に随伴して、大坂で坂本龍馬に出会う。そんなあわたたしい時期の直前にあたる五月にこの文書が書かれて戒平に渡されている。

〔現代訳〕  
わが神影流刀術における載の位は、秘伝の刀術であるが、貴殿が精を出して学んできたのでお伝えしました。  
なお、後日正式な手続きをもって申し渡します。以上。  
文久三(一八六三)年五月  
樋口真吉

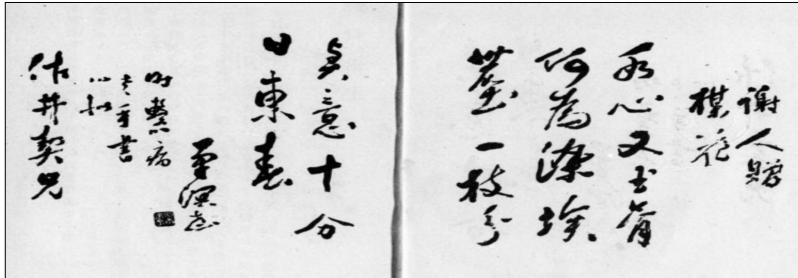
真吉が中村に居るのだから正規の免許皆伝証書が渡せられたはずと思うが、戒平が敢えて真吉の伝記の先頭にこの一文を載せたのは後日正式の手続きをもつて・・と書いた部分が出来ていなかったのではないだろうか？この一文が戒平にとつての免許皆伝証書だった可能性が高いと思う。

○文書二

●この文書は佐井寅次郎宛てに書かれている。この時期佐井寅次郎は、山内容堂公の推薦で三条実美家に奉職していたので東京に居た。恐らく真吉の病気の報を聞き見舞いに来たのではないだろうか。真吉は漢詩が得意であったから、佐久間象山と別れる際には象山から漢詩を贈られている。この文書の前半はその昔、真吉が博多の亀井塾にて漢学を学んだ際、亀井南溟（なんめい）から真吉が拝領した惜別の漢詩に自分はどう先は長くないようだと告げる文章を添えて寅次

郎に託したのではないだろうか。筆を持つ手も弱い中で、見舞いに来てくれた佐井寅次郎に、かろうじて自分の想いを書き伝えた様子が感じられる。特に南溟の署名の下に印とあるのは南溟の印なのであろう。つまり漢詩の部分は亀井南溟の筆跡であり、南溟から託された漢詩の用紙に自分の想いを付記して寅次郎に贈ったので

はないかと想像する。一見すると最後まで同じ筆跡のように見えるが、最後の数行は余りに弱いから、真吉の筆跡はこの部分のみであろう。南溟の真吉とのお別れの心境と真吉の寅次郎との別れの心境が重なっている。真吉の人生最後の一文なので「樋口先生」に掲載される意味があると判断しようと思う。この漢詩の意味合いを



謝人贈  
梅花  
水心又玉有  
何為染埃  
塵一枝分  
春意十分  
日東春

南溟恵(印)  
時整病  
老平書  
以似  
佐井契兄

【読み下し】

人に謝して梅花を贈る  
水心又玉有り

何為(なんす)れぞ埃塵(あいじん)に染まらん

一枝(いっし)に春意(しゅんい)を分かつては

十分なり日東(にっとう)の春

南溟恵(印)

時に病を繫(つな)ぎて老いるか。

書して以て似(しめ)す。

佐井契兄(けいけい)

【現代訳】

人に感謝して梅の花を贈る

水面の中心にもまた美しい玉(水面に映った梅)がある。

どうしてその玉が埃や塵に染まることがあろうか。

その梅の一枝を折って、春意としてあなたと分かち合えば

この国はもうすでに十分に春である。

南溟恵(印)

こうして次から次へと病気をしながら老いていくのだなあ。書を書いて佐井契兄に捧げる。

○佐井寅次郎

渋谷先生の現代語訳からご堪能ください。ただ気になるのは契兄の二文字である。佐井寅次郎は真吉の娘婿なので普通には使わない。真吉が「佐井契兄」としたのは恐らくは自分の継嗣(ついで)三歳の行末を頼むよとの思いで最後に出会った家族寅次郎に万感の想いで敢えて最高の敬意を示したのではないかと思われがこの解釈は間違いだらうか。

●佐井寅次郎は天保十三年(1842)に、幡多郡中村(現・四万十市)の岡村家に生まれ、名を正敏と言ひ、後に佐井和之助の養子となつた。学問は安岡良亮に、剣術は樋口真吉に学び、砲術は山崎慎太郎に習つている。幡多郡奉行下役として郡治に尽力し、その功により徒士目付として高知城下に移住したとあり、正に真吉

の経歴と重なる。土佐勤王党に153番目に加盟署名している。また、慶応三年(1867)に山内容堂の側役となつた。その後、佐々木高行、中山佐衛士と共に四国・九州方面を巡つて諸藩の動きを探り、勤王の同志と倒幕の密謀を計るなどで活躍。明治維新後の明治二年(1869)には、山内容堂の推薦で三条実美の側役を務めていたが、翌明治三年(1870)に

病気を煩ひ辞職し、高知へ帰国するものの、回復せず明治四年(1871)に病死している。享年三十歳であった。●この記述からすると、佐井寅次郎が病気の真吉を見舞つたのは三条家を辞して高知に帰京する際であったかもしれない。そのように想定して真吉の書いた二行を読むと真吉の寅次郎へ想いが契兄の二文字に凝縮されているように見える。この手紙

は真吉の自筆の部分は一行と宛名のみで、真吉には既に多くの文字を書く余力すら無かつたことが伺える。

### ○龍馬と佐井

●坂本龍馬とも接点があったらしく龍馬から佐井寅次郎宛ての手紙が残されている。

「佐井虎次郎 宛 (原文)」

此度のお咄お、クハ敷成可被遣候。愚兄の内此佐井ハ北奉行入町杉山佐井虎次郎幸助方ニて御尋可被遣、此杉山にも私の咄御なし可被遣候。佐井よりハ曾而手紙参りたり、いまだ返書不出候得バ、此度の事くハしく御咄し被遣、其上彼手紙の礼も御申可被遣候。竜馬が乳母此うバわ私しお、きづかいおり候ものゆへ、何卒此ぶじなる事を御直二御申、愚兄が家御出被下候時に御まねき被成候得バ、早々参上仕候。」

(現代語訳)

「この度のお手紙は、詳しく書きますね。兄の家へこの佐井虎次郎

(土佐藩士)が北奉公人町の杉山幸助の家に訪ねてきますので、その旨、杉山にも私の話をしあけて下さい。●佐井虎次郎(のちに捕縛された近藤勇を板橋で斬首した人)「佐井虎次郎よりかつて手紙を頂いたが、いまだに返事はだしてないの、これも詳しく話してあげて下さい。これは佐井へのお礼も兼ねた手紙です。龍馬の乳母。この乳母は私を、心配してくれている人です。何とぞ御無事でいるといいと思つてます。兄の家へ来て下さる時に、呼んで頂ければ、急いで行かせて頂きます。」

### ○佐井と勤皇党

佐井寅次郎が迅衝隊のメンバーに載つていないので、少し調査が必要になります。

●武市瑞山は文久元年(1861)には再度江戸に出て、長州の久坂玄瑞、高杉晋作、桂小五郎たちと交わります。まず勤皇の志を固め、ついにその年9月には高知に帰り、土佐勤皇党を組織し、彼はその盟主となったのである。この土佐勤皇党に加盟した者は、坂本龍馬、中岡慎太郎、間崎滄浪など192名であるが、幡多では、佐井松次郎(中村)、矢野川龍右衛門(三崎)、田辺豪次郎(十川)、佐井寅次郎(中村)の4名だけである。瑞山と交りのあった樋口真吉も岩村通俊も、これに加盟していないが、それらについて『維新土佐勤皇史』には「血盟簿以外の勤皇同志人名録」と題して次の記事と幡多人士があげられている。

「血盟者の名簿に列せざる勤皇同志は、或は遠隔の地に住し、或は其の地位の利害より、或は血盟をなす暇なく、或はその血盟中止後に蹶起せる人々にして、要するに、其の精神の血盟者と異なる所なきは、現に左に列記する人の中に数十名の殉職者を出したる事実、之を証し得て余りありといふべし、故にその血盟書の名簿に列する否とは、もとより敢てその間に軽重する所なきなり。」と非加盟者の立場を説明して、血盟外の同志として人名をあげているが、その中で、幡多の人は次のとおりである。

桑原戒平  
樋口真吉  
岩村左内(通俊)宿毛  
樋口甚内  
桑原平八  
斎原治一郎(大江卓)宿毛  
このように宿毛の人物四人も含めて幡多から十一名が記されている。●土佐勤皇党に敢えて真吉は署名しなかったが、幡多から四名が加入、佐井寅次郎はその一人であった。そして佐井寅次郎は武市瑞山の助命嘆願書にも署名しているから若さ故でもあったろうか、なかなか活発に活動している。徒党を組んで行動することを好まなかった真吉とはちがっていた。この佐井寅次郎が後に容堂公の側近にまで出世しているから有能な青年であったと思われる。容堂公の側近に

### 【補注】

梅は百花の魁として、いち早く春を知らせる花として知られ、また塵埃に染まらず清廉潔白で高潔さを象徴するものでもある。この詩は、病床にあった真吉が、見舞いに来た義兄に対して、この書を梅の一枝とともに贈ったものと想像される。

### 渋谷先生補注

●上記に渋谷先生の補注をご紹介します。佐井寅次郎に対するこの一文の意味がしみじみとよく分かります。「契兄」とある以上義兄と解釈されるのが常識だと想います。●二通目の佐井寅次郎



Photo by Oncyan

への手紙に就いて、南溟の印がどうしても気になつてゐる。南溟から貰つた漢詩の書状に直に追記して寅次郎に託したのではないかと勝手な説を述べたが、筆跡をよくよく吟味してみると最初から最後まで真吉の筆跡のようにも見える。ではその場合全体が真吉の手紙であるなら南溟の後ろに何故に「印」があるのか疑問になる。いろいろな解釈があつても良いとも思うが、この一文が真吉の絶筆となつた。そしてこの一文は新発見ではなく既にその存在は知られていた

ことも判明した。佐井寅次郎を含む佐井家について今後調べてみたい。この項に就いては『高知県人名事典』高知新聞社、『土佐の墓』山本泰三・著土佐史談会、ネットの情報などを参照しました。

### ■真吉の別の顔

●日記を追っていくと真吉に様々な辞令がでてくる。職務が替わることには不思議ではない。その中でかなり違和感を感じる職務があった。真吉の専門分野でない職務なのである。

【慶応二年八月】**铸造局より御厩方へ**  
 【慶応三年十一月六日】**貨殖掛兼帯被命**  
 七日大坂へ、八日大坂藩邸に入り真辺氏遭う  
 九日森善右衛門より約定書受け取り  
 十一日帰京  
 岩崎弥太郎が大坂に来ている時期と重なる。

### 土佐の藩札

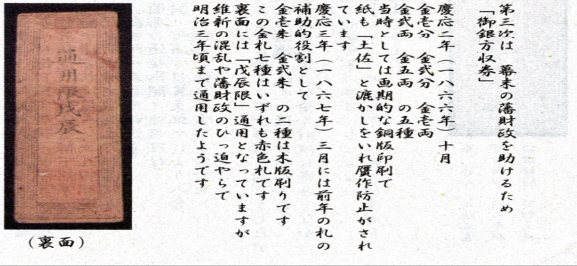


●铸造局と貨殖掛兼帯被命の職務名にはいささか驚いた。真吉には全く似合わない。

先ず慶応二年の記述は土佐勤皇党弾圧の余波で真吉は二年半に及ぶ冷や飯を食う期間を経て初めての記事である。高知にて勤務する真吉はこの間の日記類の記録は一切ない。この慶応四年八月に铸造局より御厩方に職務が替わったとあるので何時からこの職務に就いたかは不明である。



藩札を発行していた歴史の研究である。これを見ると土佐藩のみならず各藩は財政の運営上独自に貨幣を発行して経済を運営していたらしい。特に幕末には戦費の調達を目的に藩札を発行していたことが記録されている。真吉の記録と土佐の藩札の記録を照合すると、慶応二年十月に土佐藩は「御銀方収券」五種類を発行した。当時としては土佐和紙を使い、「土佐」の文字の透かしを入れて二七札防止をした紙幣だったという。この貨幣発行にか



第三は、幕末の藩財政を助けるための「御銀方収券」  
 慶応二年（一八六六年）十月  
 金五両、金五分、金五両、金五両の五種  
 当時としては画期的な銅版印刷で紙も土佐産と混かしをいれ贋作防止がされています  
 慶応三年（一八六七年）三月には前年の札の補助的役割として二種は木版刷りです  
 金五両、金五分、この五種はどれも赤色札です  
 裏面には「成金紙」通用となつていますが維新の混乱や藩財政のひっ迫や明治三年頃まで通用したようです  
 (裏面)

かわる職務に真吉も就いていたことが判る。真吉の几帳面で実直な



「勤業局手形」と「土州銀券所札」  
 戊辰戦争の五役者となった土佐藩は戦費の調達と藩財政の危機を救うため民間からの莫大な借入金や紙や砂糖など藩の特産品を買い上げるため発行されました  
 「勤業局手形」  
 慶応三年（一八六七年）五月  
 銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁  
 銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁  
 同一年に発行された増発かつぎ  
 第二勤業局手形 銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁  
 第三勤業局手形 銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁  
 第四勤業局手形 銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁  
 第五勤業局手形 銀拾五匁、銀拾五匁、銀拾五匁

術があつたのか不明で慶応三年の京都在任時に貨殖掛兼帯被命を受

人柄からこの職務に任命されたのではと思われるが必ずしも本人が喜んでこの業務に従事したかは不明である。恐らく真吉の内心は心ならずもの心境であつたと思われる。当時土佐に藩札を印刷する技



●「この「勤業局手形」と「土州銀券所札」は非常時の戦費調達が目的のため領内では正貨

と同じに通用させて強制的に金銀貨と交換させることは無かつたのが特徴だ」と書かれている。そして明治維新となり次の記述がある。「明治三年七月新政府により銀目を廃止し、金本位制になることが決り藩もこれに対応し旧藩札を回収する目的で新しく札を発行しました。・これは銅版印刷で券面は鯨と鯉の躍動的図柄を配し、裏面も土佐から高知藩と代わっている」とある。また明治三年になつても藩が存在していた

のである。廃藩置県は確かに明治四年なのでそれまでは藩が存在して経済を仕切っていたことになる。それにしても戊辰戦争時の巨額な戦費を藩札で賄っていたので、商家に溜まっていた藩札は平和裏に無事換金できたのであるのか？その混乱の話は大きくは伝わっていないが、藩札を大量に引き受けていた商家の中には明治政府発行の貨幣に交換でき無かつたケースはあつたようである。泣き寝入りしたと思われる。

### 編集後記

●龍馬ワールド四万十がいよいよ今月二十八日に四万十市で開催される。前夜祭・大会・エクスカーションと三日間で約三百人余が参加し、龍馬一色のイベントとなります。その中にどこまで樋口真吉をアピール出来るかが課題でしたが、意気込んで企画から参加した我が顕彰会提案の樋口真吉コースのエクスカー

●樋口真吉の生誕日十一月十四日がもう近いのです。1年の早いこと光陰矢のごとしです。